

半歩遅れの

読書術

森本 あんり



昨年の大学院では、『リベラリズムはなぜ失敗したのか』パトリック・J・デニン著、角敦子訳・原書房）を取り上げた。各章を担当した学生には、プラトンやアリストテレスやトマスなど引用された文献をすべて吟味し、著者の論述と整合的かどうかを調べることを求めた。多彩な資料を統一的な視点から考え直すことができ、よい授業になったと思う。

優れた書物には、必ずこうした古典の読み直し作業が含まれている。といって、古典はみな

原語で読まねばならない、というわけではない。英語圏の著者は英訳版しか使わないが、それを咎める気は毛頭ない。日本語でも英語でも、自分の母語で深く考える能力を養うことは、外国語を学ぶにまさって重要である。だから初等教育への英語導入や大学入試の英会話力検定という施策に、私は反対である。

ところで、デニンの言う「失敗」は、比類なき成功ゆえの失敗である。リベラリズムが個人の自立と解放という原理に忠実

良書が求める「古典の読み直し」

自律し自由になるために

で、その実現に成功したからこそ、はじめから内在していた問題が露呈した。たしかに、人は自然や共同体から切り離され、伝統やしがらみから解放されて自分の意志のままに生きることができるようになった。しかしそれで得たものは何か。

自由とは本来、自分の欲望の赴くままに生きることではない。古典的な理解では、むしろそれは隷属であって、自由とは自己統治を意味する。人は、生まれながらに自由なのではなく、習慣と学習と徳育によって

はじめて自律し自由になる。だからリベラルになるための技術、すなわちリベラルアーツの教育が必要なのである。

デニンは、現代の論客の中ではおそらく宗教的な伝統に足

場をおく保守主義の一人に数えられるのだろう。わたしは自分ではなおリベラルのつもりだが、リベラリズムが掲げてきた「気高い嘘」に目をつぶることはできなくなった。これまで識者たちはよく公共心の欠如や政治への無関心を嘆いてきたが、それらもリベラリズムの当然の帰結なのかもしれない。

人間の欲望には限りがなく、世界は有限である。だから人間が近代的な意味で充足することはあり得ない。人生には、自分の手で何かを「掴み取る」だけでなく、「与えられる」という感謝の感覚が枢要である。文化(culture)の深みには、宗教(cult)が織り込まれているのである。

(神学者)